
非日常の旅人

泡泡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

非日常の旅人

【Nコード】

N6285W

【作者名】

泡泡

【あらすじ】

日常をただぼーっと生きていた主人公に与えられた非日常への切符は。

そしてどう楽しむのか？

処女作です。生温かい目でご覧下さい。そして更新は止まり気味です。

第一話　全ての始まり

???? サイド

???? 「じじじじ……」

寝た時は自分のベッドの上だったはずなのに、起きてみると真っ白い空間の中にぼつりと横になっていた。キヨロキヨロと見渡すと何かを書いてありそうな手紙が。

???? 「えつと、あなたは日常に飽き飽きしていたみたいなので非日常へと飛ばします。……んっ？特典は5つ、思い浮かべるだけで次の瞬間には自分のものになっています。時間は無限にありますので悩んで下さい。」

はははは……。とこぼれる笑みは隠せなかった。だって日常に飽き飽きしていて並行世界パラレルワールドに行ってみたかったんだから。

???? 「よぉーし。一つ目は異世界をある周期で渡れる力、二つ目はその行った世界の中で最強と言われている人物の2倍の力。三つ目は世界に対応した知識。四つ目と五つ目は保留でいいか？」

と、誰に言うでもないが呟いてみると真っ白な空間が瞬いたので了承したと取った。

意識を集中して、まだ名も決まっていない主人公が一番最初に行こうとした世界は……？

???? サイド終

第一話〜全ての始まり〜（後書き）

僅かながら作者の夢も入っています。
感想はどんと来いですが、ガラスな心は砕かなければ幸いです

第二話　異世界への第一歩

??? サイド

ピカッと森の中が一瞬光を放って静かになると、一人の青年が現れた。

我らが主人公、名を設楽凱しだらがいと名乗ることにした。

「ようやつと最初の異世界へたどり着いたか。まっ、旅行気分でも楽しもうかな。並行世界って言うぐらいだからオレの記憶に頼りきれないし……まず最初に場所の確認に図書館へGO」

きれいな図書館にたどり着いてここら一帯の地図を眺めると“海鳴市”の文字があった。そしてあたりを見渡すと車いすに乗った、ため……はやてらしき少女の姿も確認できた。

「つてことはA'sに突入はしていないから無印ってとこかな。あとは戸籍……どうすっかな。無計画で来たことのツケが一つあつたし」

ふと、頭に浮かび上がる地図、能力二つ目の知識とやらが働いたようだ。テクテクと問題なく歩きここが初めて来た場所でないかのように行き着いた場所は二階建てのマンションだった。中に入ると自分の表札があつてここが、自分ちなことは間違いない。

「野宿回避。おっ、戸籍発見。行き当たりばつたりでもなんとか能力働くもんだわ。原作はあまり壊したくないから姿現さずに無印とA'sを影から応援して三期から一管理局員として働くか！

！まずはリミット付けてデバイス造って、っと。おお、やること沢山あるしどれもこれも日常とかけ離れててワクワクしてきた。」

凱サイド終

“ 一日目終了 ”

第二話　異世界への第一歩（後書き）

えつと原作の影ありませんね。

早く原作人物を出したいですが駄文ですみません。

第三話〜主人公の紹介〜（前書き）

デバイス情報を追加。

第三話　主人公の紹介

～主人公～

名前：設樂凱したらがい　名字の由来は珍しい名字の上位に入っていたという安易な理由。

年齢：18歳ぐらい

容姿：ガンダムWのヒロ

性格：楽観的でたま～にめんどくさがりな一面も。

能力：？異世界旅行する力

？世界に適応するための知識

？その世界の最強人物の2倍の力

魔力：EXだがDにリミッターを付けて生活。

？干涉が必要な時に干涉を教える直感

？？？？？

～デバイス～

名前：レン　名前の由来は殲滅せんめつてんし天使からとりました。

年齢：14歳の少女をイメージ

容姿：いつもは凱の手首にかかっている腕輪だが人間化すること
も可能。紫色のワンピースを着用。

性格：凱に似て楽観的なこともあるが怒りが頂点に達すると、暴
走状態に……。

魔力：A A S S 凱が頭に浮かべている技・魔法を再現できる
ぐらいリンクしている。

第三話　主人公の紹介（後書き）

今流行している転生とは違う異世界へ旅立った青年の生き様を紹介できれば僥倖です。忘れないうちにオリジナルと原作混ぜて投稿したい（^^）

第四話　魔法少女との遭遇（前書き）

原作に少し近づける？かも

第四話　魔法少女との遭遇

凱サイド

「あつ。流星群？いや物語の始まりだ。確認はしてないけどジュエルシード落ちてきたか。デバイス造れたし良かったのかな」

？『いや～ちゃちゃっと造られちゃったから肝は冷え冷えもんでしたがね～』

「んっ、レンかぁ。デバイスには“レン”って付けたけど気に入った？」

レン『そだね。気にいったよ、マスター。一週間で造っちゃった時にはびっくりしたけど異世界旅人なんだもんね。人型にもなれるし……』

「レンにもモデルはいます。ファルコムさんの鎌持った天使です」

凱サイド終

？「助けてっ……」

なのは「っ。今何か聞こえなかった？」
すずか「なにか？」

なのは「なんか声みたいな。」
アリサ「別に」

「さすが「聞こえなかったかな」

？「助けてっ……」

なのは「っ……」 駆け出すのは。

アリサ「なのは!!」

「さすが「なのはちゃん!!」

なのは「ハアハアハアハア……多分こっちのほうから、ハアハアハア……っ」

傷ついたフェレット？を抱いてよく見てみる。

アリサ「どうしたの？なのは」。急に走り出して

「さすが「あつ、見て動物？怪我してるみたい。」

なのは「うっうん、ど、どうしよう?」

アリサ「どうしようって。とりあえず病院?」

「さすが「獣医さんだよ」

なのは「ええっと、この近くに獣医さんってあったっけ?」

アリサ「ああ、えっと、確かこのあたりだと」

「さすが「待って、家に電話してみる」

じつと少女たちを眺めるフェレット、そして気絶……。

凱サイド

凱「ふむ、ここまでは原作通りか。イレギュラーなことが起こり
そうなのは初戦闘になりそうだ」

近くの高い木の上からステルスをかけて覗く……いや原作を
堪能する凱とレン。

凱サイド終

獣医「怪我はそんなに深くないけどずいぶん衰弱してるみたいね。きつとずっと独りぼっちだったんじゃないかな」

なのは「院長先生どうもありがとうございます」

二人「ありがとうございます」

獣医「いいえ、どういたしまして」(*^|^*)

原作通りなのでカット……。

?「聞こえますか?ボクの声が聞こえますか?」

なのは「っ!!昨夜の声と昼間の声と同じ声!!」

?「聞いてください。ボクの声が聞こえるアナタ。お願いします。ボクに少しだけ力を貸してください」

なのは「あの子が、しゃべっているの?」

?「お願い、ボクのところへっ……時間が……もっつ……危険が……」

?「お願い……届いて……」

いてもたってもいられなかった本当の無印主人公なのは、動物病院へと急ぐ。すると、根こそぎ倒された樹木を見、そして得体の知れない黒い物体が昼間のフェレットを襲っているのを目にする。

しつかりと自分に飛んできたフェレットを捕まえたなのは。

なのは「えっ、なにに？ いったいなに？」

？「来て、くれたの？」

なのは「しゃ、しゃべった……。」

凱サイド

凱「おおっ、フェレット羨ま……んんっ、最初の見せ場、か。イレギュラーが出た場合はすぐに行動だ、レン。」

レン「りょかい、マスター」

凱「作者の都合上デバイスは日本語だって、さ。」

レン「マスター、何言ってるの？」（……）

凱「いつ、いや、何か電波のようなものを受信したんだ……」

レン「へえ」。あれっマスター、あの子がセットアップする前に未確認物体が攻撃しちゃうよ」

凱「くそっ、これがイレギュラーかつ、レン、ソードモードで切り刻む」

凱サイド終

なのはサイド

「……そして不屈の心はっ、えっ駄目間に合わない」

？「はああああゝ二刀流四段突き」

なのはを攻撃しようとしていた触手があつという間に消し飛んでゆく。おまけにコンクリートの壁に標本のごとく光り輝く杭が動作をさせない。

「えっ、誰？」

？「そんなことより早くその続きをつ」

「この胸に、この手に魔法をレイジングハートセットアップ！
！」

フレット「成功だ」

「ふえ、ふえ、えっつ、な、なんなのこれ？」

なのはサイド終

第四話　魔法少女との遭遇（後書き）

凱がものの見事に空気、そして原作との遭遇ですが良作なので変えようがないですね。オリキャラ入れるのに四苦八苦してこの駄文（@ | @ ; ）
お便りをお待ちしています

第五話　初戦闘とその後（前書き）

早く良い文章が書きたい今日この頃。戦闘上手く書けるかな
英語書けるところは書きますが駄文ごめんなさい。

第五話　初戦闘とその後

なのはサイド

なのは「うそ、なんなの、これ？・・・っ。ふ、ふえーこれ何？」

後ずさるなのは、追い詰める異形の物体。

フェレット「来ますっ！！」

なのは「っ」と、身構える。

空高く舞い上がりなのはの頭上に降りかかる未確認物体。

杖「Protection」

自動防御？的になのはの前方に張り出すバリア。

？「ほうほう、なかなか初戦にしては大したもんだ。それにしても小学生に救援求めるか普通？」

プロテクションに弾かれた物体があたり一面の道路や電柱に突き刺さってゆく。

フェレット「僕らの魔法は発動体に組み込んだ“プログラム”と呼ばれる方式です。そしてその方式を発動させるために必要なのは術者の精神エネルギーです。そしてアレは忌まわしい力のもとに生み出された思念体。アレを停止させるにはその“杖”で封印して

元の姿に戻さないといけないんです」

なのは「よくわかんないけど、どうすれば？って、あれっ。さっきの人は？どこ行っちゃたんだろ」

？「こちらはあまり干渉できない。イレギュラーな事にしか手を出せないのだ。詳しくは後で説明する！！」

フェレット「えっと、まあとりあえずさっきみたいに攻撃や防御のような基本的魔法は心に願うだけで発動しますが、より大きな力を必要とする魔法には呪文が必要なんです」

なのは「呪文？」

フェレット「心を澄ませて・・・心の中にアナタの呪文が浮かぶはずですっ」

？「ってか、敵は待っててくれないよな。これも違うところかつ。レン、頼むっ。」

レン「おっけー、石化の槍よ、天上より降り注ぎ我に仇成すものを刺し貫かん」

なのはとフェレットの背後に迫り襲おうとしているのを動きを止め心に浮かぶ呪文が出てくる時間をかせいだ。

杖「Protection」.

なのは「リリカルマジカル」

フェレット「封印すべきは忌まわしき器。ジュエルシード！」

なのは「ジュエルシード封印っ!!」

杖「Sealing Mode・Set up」

杖から発動したピンク色の紐が異形の動きを絡めてゆく。

杖「Stand by・Ready」

なのは「リリカルマジカル、ジュエルシードシリアル21っ!!
封印」

杖「Sealing」

今まで荒れ狂っていた雰囲気が嘘のようになり元に戻ったジュエルシードがキラッと輝く。

なのは「あっ」

フレット「これが、ジュエルシードです。“レイジングハート”で触れて」

レイハ「Receipt No.???」

ジャケットが消え着ていた服に戻ったなのは。手のひらには赤い宝石が。

なのは「あっ、あれ。終わった…の?」

フレット「はい、アナタのおかげで。ありがとう…」

緊張の糸が切れたのか道路に倒れこむフェレット。

なのは「ちょ、ちよつと大丈夫、ねえ。」

？「いや、それよりも、ちよつと場所移動したほうがいいんじゃない？道路をこゝんなにしちゃってさっ……。オレも少し加担してるけどw」

なのは「っ、も、もしかして私ここにいると大変あれなのは……。と、とりあえずごめんなさい〜」

なのはサイド終

凱サイド

ハアハアハアハア……。近くの公園まで避難して来た二人と一匹？

フェレット「す、すみません」

なのは「あつ、起こしちゃった？ごめんね、乱暴で。怪我痛くない？」

フェレット「怪我は平気です。もうほとんど治っているから」

なのは「ホントだあ。怪我の跡がほとんど消えてる、すごい。」

フェレット「助けてくれたおかげで残った魔力を治療に回せました」

なのは「よくわかんないけど、そうなんだ……。ねっ、自己紹介していい？」

フェレット「あっ、うん」

なのは「私、高町なのは。小学校三年生。家族とか仲良しな友達
は“なのは”って呼ぶよ。」

ユーノ「僕はユーノ・スクライア、スクライアは部族名だから
ユーノ”が名前です」

なのは「ユーノ君かぁ。カワイイ名前だね。」

凱「いや、男の子にかわいいって面白い子だな」（空気なオ
リ主）

なのは「助けてくれてありがとう。名前教えてくれる？」

凱「ああ、オレは設楽凱、名字でも名前でもどっちでもいいよ」

なのは「じゃあ、凱君って呼ぶね。」

凱「それでいいよ。で、そのフェレ……。いやユーノはなん
で落ち込んでるんだ？」

ユーノ「……。すみません。あなたを。」

なのは「“なのは”だよっ！」

ユーノ「なのはさんを巻き込んでしまいました。」

なのは「あ、その……。えっと、多分私平気！あっ、そう
だ。ユーノ君怪我しているんだしここじゃ、落ち着かないよね。と
りあえず私の家に行きましょっ。後のことはそれから、ねっ！！凱
君はどうする？」

凱「まあ夜だし女の子一人で返せないよ。キミんちまで送ってく。
怒られることは確実、だけどね。少しのフォローはするつもり」

なのは「??」

凱サイド終

なのはサイド

？「おかえり」

なのは「っ。お、おにいちゃん。」

兄「こんな時間にどこにお出かけた？」

なのは「あの、その、えっと」

？「あら、かわいい……」

なのは「お、おねえちゃん」

姉「あら？なんか元気ないね。」

兄「こんな時間に外出とはいただけない……」

姉「まあまあ、いいじゃない。こうして無事に帰って来たんだし。それになのは良い子だからもうこんなことしないよね？」

なのは「うん、おにいちゃん。内緒で出かけて心配かけてごめんなさい。」

姉「はいっ、これで解決。っと、あなたは誰？見かけない顔だけれど」

凱「すみません、動物病院でそちらの子を見つけまして、どうしたのかと聞けばぐったりしているフェレットを抱えてオロオロしていたものですから、家に連れ帰って保護したらどうかと言った手前、送りました“設楽凱”と言います」

兄「そうか、それはすまないことをしたね。ありがとう」

姉「なのはを送ってくれてありがとう」

凱「いえいえ、楽しかったのでそれでおっけーですよ。近くに住んでいますので何かあれば言ってください。これ、住所です。」

兄「これは、ご丁寧に……。んっ、ここに人住んでいたっけ？」

凱「数日前に引っ越してきたばかりで街の散策中に会ったんです

よ。ではでは」

なのは「あつ、あの～。えっと、今日のことは」

凱「ああ、大丈夫ですよ、どこかで会えるはずですから、ちゃんと説明しますよ。」

なのは「はいっ。あ、ありがとう。凱君。」

なのはサイド終

第五話〜初戦闘とその後〜（後書き）

原作にオリジナル入れるの難しか〜。動画片手に悪戦苦闘。お気に入り登録してくださった皆様に感謝の一言です。

第六話、魔法少女と魔法青年（前書き）

戦闘なし。日常パートです

第六話　魔法少女と魔法青年

なのはサイド

姉「でも、かわいい動物ね。母さんなんかこの子見たらかわいすぎて悶絶しちゃうんじゃない？」

兄「その可能性は否定できんなあ……。」

～翌朝～

なのはの携帯が目覚まし時計のかわりをして鳴り響く♪

なのは「ふあゝあ。おはよ、ユーノ君」

ユーノ「あつ、そのおはよう」

なのは「えっと、とりあえず昨夜はお疲れ様。」

ユーノ「それは、こちらこそ」

なのはサイド終

～回想～

昨夜、お父さんとお母さんにユーノ君を見せたら。

母「わあゝ。かわいいゝ。ホントかわいいよね」「ブンブンと振り回されるユーノ。」

なのは「お、お母さん。ほどほどに……」

父「ふむ、なかなか賢そうな“イタチ”じゃないか？」

姉「フェレットだよ、お父さん」

父「何か芸とかできるのかな？ほれっ、お手？」差し出された手にピトッと付けるユーノ。

父・母「おおっ」

母「ホント、賢いわねゝ」

なのは「と、もう大騒ぎで。その後もユーノ君のご飯についてとか、そのほか色々とドタバタしていて昨夜はほとんどお話しできなくて……」

～回想終了～

なのはサイド

なのは「名前で呼ぶの慣れてくれた？」

ユーノ「うん。なのは」

出来たお話は普通に名前で呼んで普通にお話ししてねって事くら

い。

なのは「じゃあ、私学校に行かなきゃならないから帰ってきたらお話を聞かせて？」

ユーノ「あつ、大丈夫。離れていても話は出来るよ！」

なのは「??」

ユーノ（なのははもう、魔法使いなんだよ）

なのは「あつ、これ。わたしを読んだ時の……」

ユーノ（そつ、レイジングハートを身につけたまま心で僕に話しかけてみて）

なのは（こう?）

ユーノ（そつ、簡単でしょ。あいている時間に色々と話すよ。僕のこととか、魔法のこととか、ジユエルシードのこととか）

なのは「うん」

～学校～

なのは「おつはよ」

アリサ「なのは！昨夜の話聞いた？」

なのは「ふえ、昨夜って？」

すずか「昨日行った病院で車の事故か何かあったらしくて壁が壊

れちゃったの……」

アリサ「あのフェレットが無事かどうか心配で……」
なのは「あつ、えくとね。その件はそのー」

アリサ「そつか、無事でなのはんちにいるんだ」

すずか「でも、すごい偶然だったね、たまたま逃げ出してたあの子と道でバッタリ会うなんて」

アリサ・すずか「ねえ」

なのは「アハハ、嘘はついてない、嘘はついてない。ちょこつと真実をばかしただけw」

なのは「あーそうだ、あの子なんだか飼いフェレットじゃないみたいで当分の間うちで預かることになったよ。」

すずか「そうなんだ」

アリサ「名前付けてあげなきゃ、もう決めてる？」

なのは「うん！ “ユーノ君” って名前」

ユーノ（ジュエルシールドは僕らの世界の古代遺産なんだ。本来は手にした者の願いを叶える魔法の石なんだけど、力の発現が不安定で昨夜みたいに単体で暴走して、使用者を求めて周囲に危害を加える場合もあるし。たまたま見つけた人や動物が、間違って使用してしまつてそれを取り込んで暴走してしまう場合もある）

なのは（そんな危ない物がなんでうちのご近所に？）

ユーノ（……僕の、せいなんだ。僕は故郷で遺跡発掘の仕事をしているんだ。そしてある日、古い遺跡の中であれを発見して調査団に依頼して保管してもらっていたんだけど、運んでいた時空船が事故かなんらかの人為的な災害に遭つてしまつて。21個のジュエルシールドがこの世界に散らばつてしまつた。今まで見つけられた

のはたつたの二つ。)

なのは(あと19個か)

? (でも、それってユーノのせいじゃないっしょ。事故か人為的な災害だったらさ。ぼくのせいだゝって言うからユーノがとんでもないことをしでかしたのかと思っちゃったよ)

ユーノ(うん、事故なんだ・・・。)

なのは(じゃあ、ユーノ君のせいじゃないよ。でも、今の声って?)

ユーノ・なのは(凱君???)

凱(おうっ、昨日ぶりだね)。あまり干渉しないって言ってたんだけどこっちの事情も少し話さなきゃゝって思って。どこで念話入れようか迷ってw)

ユーノ(確かにそんなこと言ってましたね。凱さんはどこかに所属しているんですか?)

凱(んゝっと、所属はしていないんだ。どう言ったらいいのかな。
パラレルワールド並行世界から来たって言ったら信じる?)

なのは(いまいち分らないよ)

凱(君たちの時代のこと詳しく乗っている百科辞典みたいなのがこちらには存在するんだけど何%かの確率で史実とずれが生じるときがあるんだがその時に行動するのが自分たちってこと)

ユーノ（だからあまり干渉しないと言っていたのか……）

凱（極力、手は貸さないけどイレギュラーなことがおきたら行動するだけ覚えてて。）

ユーノ（そうですか……）

なのは（あれっ、ユーノ君どうしたの？）

ユーノ（見つけたのは僕だからちゃんと元の場所に戻さないと駄目だから……）

なのは（なんとなく、なんとなくだけど。ユーノ君の気持ち分かるかもしれない。真面目なんだね、ユーノ君は。）

ユーノ（えっと、昨夜は巻き込んで助けてもらって本当に申し訳ないんだけど、この後は僕の魔力が戻るまでの間ほんの少し休ませてもらうだけでいいんだ。1週間、いや5日もあれば力が戻るからそれまで……）

なのは（戻ったら、どうするの？）

ユーノ（また独りでジュエルシードを探しに出るよ……！）

なのは（それは、ダメ）

ユーノ（だ、だめって……）

なのは（わたし、学校と塾の間は無理だけどそれ以外の時間だっ

たら手伝えるから)

ユーノ(だけど、昨日みたいに危ないことだってあるんだよ)

なのは(だって、もう知り合っちゃったし。話も聞いちゃったもの。ほっとけないよ!それに、昨夜見ないなことが近所で度々あったりしたら皆さんのご迷惑になっちゃうし。ねっ!ユーノ君、一人ぼっちで助けってくれる人いないんでしょ?一人ぼっちはさびしいもん。わたしにもお手伝いさせて)

なのは(“困っている人がいて助けてあげられる力が自分にあるならその時は迷っちゃいけないって”これうちのお父さんの教え)

なのは(ユーノ君は困ってて、わたしはユーノ君を助けてあげられるんだよね?魔法の力で)

ユーノ(・・・うん)

なのは(わたし、ちゃんと魔法使いになれるかどうか自信ないんだけど)

ユーノ(なのははもう魔法使いだよ。多分、僕よりもずっと才能がある)

なのは(そっ、そうなの?自分ではよくわからないんだけど、とりあえず色々教えて?わたし、頑張るから!!)

ユーノ(うん・・・ありがとう) 目に涙を浮かばせながら感謝を述べるユーノ。

なのは（もう少しでうちに着くよ。そしたら、一緒におやつを食べようよ）

ユーノ（うん、そうだね）

なのは（今日のおやつは何かな）

なのは・ユーノ・凱「っ……」

なのはサイド終

第六話〈魔法少女と魔法青年〉（後書き）

ご指摘・誤字脱字がありましたら気軽にどうぞ。
次回はオリ主空気にしないように一生懸命打ちます

第七話〜少女の才能〜（前書き）

一応戦闘シーンです。オリジナル要素はすこしだけ。

第七話でようやくと一日が終わりです。少し省きながら書くと思います。

第七話　少女の才能

なのはサイド

なのは（ユーノ君、今のって？）一瞬感じた違和感に身震いしながらユーノと念話で話す。

ユーノ（新しいジュエルシードが発動している、すぐ近く）窓から外を眺めながら自分の体にまだ魔力が戻っていないことを、体を震わせて嘆く。

なのは（ど、どうすれば？）

ユーノ（一緒に向かおう。手伝って）

なのは（うんっ）

なのはサイド終

～神社の境内～

なのは達が異変を感じて間もない頃、ジュエルシードがいびつな器となって異形へと変貌した結果、赤い目が複数あり獰猛な様子で牙をむき出しにした物へと変化を遂げた。元は動物だがおびえて足がすくんでしまった女性へと襲いかかろうとしていた。なのははまだ姿が見えない。異形は女性へと襲いかかった。

間に合わないかと思った時、つむじ風のような風が巻き起こり女性と異形の間を分けた。

凱サイド

「ふいー、またか。命の危険にさらされるようなことが立て続けに起きるんだ？間に合ってよかったから良いものの・・・っ、痛」
一応、場所は分かっていたから最速で飛んできた凱は、怯えていた女性を間一髪で助ける事ができた。

だが、凱の左腕は手首からひじまで異形の牙のあとがついてしまった。
った。

レン「マスター治しますか？」デバイスなのに心配する様子は人間と一緒だった。

「大丈夫だよ、レン。なのは達が来るから完全にじゃなくて少しお願い」あまり深く考えていないオリ主みたいだ。腕を軽く回してみると、骨に響くような痛みがあったがレンの“治療”という言葉が聞こえてくると痛みが無くなってきたように思えた。

凱サイド終

なのはサイド

ユーノ「なのはっ、レイジングハートを」神社までの長い階段を息を弾ませながら駆けあがる。

「うん」手には輝く赤い宝石、レイジングハートが握られていて出番を今か今かと待っているように思えた。

ユーノ「原住動物を取り込んでいるから実態があるぶん、手ごわくなっている・・・」なのはに今回封印しなきゃならない相手の

様子を簡単に説明。

「だ、大丈夫だよ。多分」境内に着いて、自分を落ち着かせようとしているがその発した声は震えている。

ユーノ「なのはっ、レイジングハートの起動を」何もしないなのはに焦ったのかユーノは、慌てて話しかけた。

「ふえっ。き、起動ってなんだっけ……」ユーノ「えっ」驚きのあまり自分の体が硬直するのが分かる。いや、そんな時間もないのかもしれない。なのはに向かって駆けだす異形。

ユーノ「我は使命を」から始まる起動パスワードを「なのはの肩に飛び乗ったユーノが言うが、駆けだした原住異形は止まらない。ユーノの視界の中に“凱”が見え、デバイスを構えているのが分かるがやはり干渉しないのだろうか。

「あんな長いの覚えてないよ」ユーノ「もう一回言うから繰り返し」分かった」

しかし、どう考えてももう間に合わない距離にまで来ていたが、いきなりレイジングハートが輝きを増し目をつぶらないといけないうらいになった。

「レイジング、ハート？」レイジングハート「スタンバイ、レディ」。セフトアップ」光に包まれるのはが次の瞬間に目にしたものはレイジングハートが杖状態になっているところだった。

ユーノ「パスワードなしでレイジングハートを起動させた」ユーノの驚きを想像してみよう。二回目起動させる初心者が途中の経過を全てとばして完成させたのだ。想像しようにもしきれないのが

事実かもしれない。

ユーノ「なのは、防護服を」レイジングハート「バリアジャケット」またまた、光り輝いて瞬間的に防護服が構成される。

突進してくる異形に対しても“プロテクション”が効いていてなのはひとつの怪我もなく倒してしまった。

ユーノ「あのダメージをノーダメージで。やっぱりだ。この子すごい才能をもってる」

「いたたた、っていうほど痛くはないかな。えっと、封印つてのをすればいいんだよね？レイジングハート、お願いね」「リリカルマジカル、ジュエルシードシリアル16封印」

元の姿を取り戻したジュエルシードはなのはが持つレイジングハートの元に吸い込まれて一件落着。

「これでいいんだよね？」落ち着きを取り戻してユーノに声をかける。

ユーノ「うん、これ以上ないくらいに」階段の一番上でなのはに声をかけたユーノもさっきまでの緊張はどこ吹く風の如く落ち着いた。

満面の笑顔を浮かべるなのはの様子は二回目の戦闘が上手くいったことをあらわしていた。

凱「お疲れ様、二人とも」凱は高くも低くもない空の上からなのは達を激励した。

「うん、ありがとう、ユーノ君もお疲れ様」それに素直に感想を返しながらかよっと空を飛びたいと思ったのはであった。

なのはサイド終

第七話　少女の才能（後書き）

　サイドって書いてあってその人が中心のときには名前を省いてみました。

　感情表現あったほうがいいですか？色々要望は受け付けていますがすぐ、向上するとは限りません。

　技・魔法の名前を常時受け付けております。知恵を貸してください

第八話　四つ目に願う力と新展開？（前書き）

オリジナルですので短いと思います。

猫に右手を引き裂かれキーを叩く度に痛いです・・・。

第八話　四つ目に願う力と新展開？

凱サイド

朝、起きて一段落した時に思ったことがあった。それは・・・
「イレギュラーが起きてから行動するのでは遅すぎるのではないか？」と言うことだ。二回の戦闘は原作主人公たちに着いて行った結果、死者を出さずに行動できただけで幸運^{ラッキー}なことは続かないのではない。という結論に達した。

「こうなったら、四つ目の能力をお願いしますか」目をつむり、意識を最初の真つ白な空間に行けるように集中する。目を開けるとそこは最初、凱がいた場所だった。

「四つ目に願うのは干渉しなきゃならないときに直感が働くようにして欲しい」・・・自分でも何言ってるのかが、分からなかったが要は動かなきゃいけないときにピンポイントで動ける事のことだ。

最初と同じように空間が瞬き、自分に今までなかった能力が芽生えた感じがあった。気がつくとその自分は自分の住んでいるマンションだったが、意識を集中しイレギュラーが起こる時期を調べた。

「んっ・・・？無印はそのまま原作通りか。良かったような面白くないような。二期目の最終決戦が危ないっつと。四層じゃなくて五層でみんなの魔力が尽きる可能性が九割の確率で生じるか。なのはとユーノには説明してあるし二期に介入しなきゃな」

それまでの間にどこか別の世界に跳べるかな？・・・えっ、いきなり別世界ですか？

凱サイド終

第八話〜四つ目に願う力と新展開?〜（後書き）

最初考えていたのは“なのは編”がすべて終了してから“別の世界”へと異世界を渡ろうと画策していましたが違う世界も良いなと思う自分があり、実行します。「それじゃあいやだ」という方がおりましたら感想言ってください。

15日と16日の境まで感想待ちます。

それまで“なのは編”と“第二の世界”での導入のどちらも考えようと思います

閑話〴〵もしも“ネギま”の世界に介入したら〴〵（前書き）

息抜きに違つ世界観を書くと同様の体操にもなるし、気分転換にもなるわ〴〵

閑話くもしも“ネギま”の世界に介入したら

凱サイド

「ここは・・・？学園都市っぽいなあ」あたりを見渡すところの世界の住人が見える。そして眼前には大きくそびえ立つ樹木が。ああ、世界樹って事は“ネギま”ですか。

「ん？いきなり人の姿が消えて魔力の高い連中が現れたか」認識障害の術がかけられ、ロープを身にまとい白髪に後頭部が長い人間？が、凱の近くに来了。

白髪の老人「ふおおおお。君がいきなり現れた不審人物かね？」いきなり現れた凱に対して不信感と警戒心を隠そうともせず一定の距離を保ちながら、話しかける老人。

「ええ、申し訳ありません。私は設楽凱したらがいと言いまして世界を飛び回る旅人です」

老人「えつ、それはどういうことだね？」やはり、旅人つて言うて警戒されるのだろうか。あたりにいるそのほかの魔法関係者を呼ぼうとしている。

「ええつと、私がいる世界ではある程度の異世界の歴史が納められている書がありまして。それを管理し良い状態へと導くのが旅人です」両手を肩より上に掲げて敵対の意思がないことを示しながらゆっくりと事情を話す。

老人「ふむ・・・。君が異世界から来たという証拠は何か持つ

ていないだろうか？それが無いと信じたくても信じられん」責任者っぽい老人がそう呟くと周りから敵意が伝わり一触即発に発展しそ
うだ。

「分かりました。レン人間化して」腕輪を老人に見せながらレンを具現化する。一瞬、目をくらませ次の瞬間には凱のそばに140cmほどの女の子が現れた。鎌はさすがに持たせていないが。

老人「そうかい。色々と聞きたいことがあるがまあ不審人物ではなさそうじゃ。でも監視は付けさせてもらっよ」と警戒を解いて周りに潜んでいる関係者を去らせた。

「ありがとうございます」お辞儀をしてレンをデバイスに戻した。これからどんなイレギュラーがあるのだろうか？

ハッピーエンドでおわるはずの物語が一転して大惨事になる可能性が八割。

「それまでは普通に暮らそうかね」

凱サイド終

閑話ゝもしも“ネギま”の世界に介入したらゝ（後書き）

書きながらふと思った。“ネギま”って魔法のキー長くなかった？

“なのは”と同じで駄文がさらに崩壊しないだろうか？

また違う世界を明日以降書きます。

閑話ゝもしも“コードギアス”に入ったらゝ（前書き）

連続投稿中。

世界観は“コードギアス”ですが誰にどのように会ったのかは全て作者の脳内変換によるオリジナル色が多いです。

ギアス編では「」が会話。（）は思考とします

閑話〱もしも“コードギアス”に入ったら

凱サイド

「わあ〱落ちてる、落ちてる」ただいま、雲を突っ切って落下中です。なぜかデバ^{レン}イスは返事をしてくれません。この世界では魔法というのが無いのでしょうか？

地上が見えてきました。女の人が車いすを移動させているのが見えます。一瞬“なのは”の世界に戻ってきたのかと思いましたが、違うようです。なぜかって、車いすに乗っている人が金色の髪の毛の女の子だからさ。あれって、ナナリーと篠崎咲世子^{しなづき せこ}って人？

「ああ。今度は“コードギアス”の世界ですかね。どう干涉しよっかな。まあ今は落ちた後の言い訳をしなきゃな」みるみるうちに地面は近づき、ちょうど噴水の中にダイブした。

「ぷっは〱。死ぬかと思った。命あつてのこの生活」無傷なのはおいといて、服を絞って水気をおとしていると。

？「だ、誰ですか？足音が聞いたことのない人です」と怯えて小声で話しかける女の子がいた。

？「お嬢様、お下がりくださいっ」車いすの前に立ってこちらを警戒しながら服に隠している暗器に手をやっている使用人っぽい女性。

「あ〱、心配と警戒させちゃってごめん。不慮の事故で噴水の中に落ちてきたイレヴンだよ」学生にも見えないだろうしこう言った

ほうがよからうと思つてのことだつた。

？「そうだつたんですか？急に知らない人の足音が増えたので驚きました。私の名前はナナリー、ナナリー・ランペルージと申します。それでこちらが……」

？「咲世子と言います。お嬢様の身の回りの世話をしております」二人とも幾分緊張と警戒を解いて応対してくれた。

「私の名前は設楽凱つて言います。ここには初めて訪れましたが良いところですね」両手を広げて心からそう思っていることを伝えた。

ナナリー「ふふつ、そうでしょう。この庭は私のお気に入りなんですよ」(あれっ、この人がどこにいるのか気配が薄くて分かりにくいです。でも、暖かいので悪い人ではないでしょう)

咲世子「あの〜凱さんとおっしゃいましたね。大丈夫でしょうか？服が濡れたままでは風邪をひきますよ？こちらへどうぞ」と、ペントハウスの中へと案内した。

「えっと、良いのですか？見ず知らずの人を案内しても……」

咲世子「ええ、大丈夫です。お嬢様が笑顔であなたを見ているのと私もあなたが悪い人ではないと思つているからですよ」って、今までは笑顔がこわばっていたのに二人とも花が咲いたかのように満面の笑顔を見せてくれる。

(ああ……ここは本当に良い場所だな。絶対ハッピーエンドにしないといけないな)水に濡れて寒い気持ち悪いのになんだか

笑顔を見ているだけで心が暖まったのに驚いた凱だった。

凱サイド終

閑話ゝもしも“コードギアス”に入ったらゝ（後書き）

多分この二人の性格はこんな感じかなゝって思いながらサクサク筆が進みました。

驚きです。

あとは水曜日以内にインフィニット・ストラトス編でも書こうかな。

閑話〱もしもISで“天才”と“異世界人”が遭遇したら〱（前書き）

小説読み返しているところなので性格がぶれる危険。

主人公の名前は統一します。

ぶつちやけ考えるのが難しいから……。

〱凱のIS〱

名前：パテルⅡマテル

外見：ガンダム〇〇のヴァーチェに装飾は薄紫色。

装着すると顔のバイザー以外は装甲によって操縦者の姿が見えない。

武装：両肩にダブルキャノン、両腕の武装を展開すると右腕にはバイザーと連動するスナイパータイプのビームライフル、左腕にはショットガンタイプの銃。

背中に近接用の鎌を背負っている（投擲用にも使用可能）

閑話〱もしもISで“天才”と“異世界人”が遭遇したら〱

???サイド

研究所つばいところにパソコンのキーを叩く音しか聞こえない空間に鼻歌交じりで歌っているウサミミ付けた女性がいた。「みんな良い子に育ってね〱。まっ天才は何でもできるけど」

――警告、警告。上空数キロカラ落下スル未確認飛行物体アリ――

「なにになに？某国のミサイル？それとも隕石かなにか？」

――カメラ二映像ダシマス。確認中、確認中。解析ノ結果似テ非ナルモノナリ――

「えつとISじゃないね。コアが無いし、ここに落ちてくるみたいだから暇だし行ってこよう！」掃除が嫌いなのかズボラなのか機械の材料でぐちゃぐちゃな中を、手で分けながら研究所の外へと駆け出した。はたしてそこで会う“天才”と“異世界人”との出会いは何をもたらすのだろうか？

???サイド終

凱サイド

「落ちる、落ちる」別世界へ行こうとした凱は飛んだ瞬間、空気の薄い空から落下中と言うオマケつき。レンと話してみると次の世界は“Is”ということみたいだ。

レン「機体はパテル＝マテルよ。あとレンがAIとして補助的な役割を果たすことができるようになりました。このままでは落下ダメージがあるので呼んでください」

「おっけ。行くぞパテル＝マテル」発動は素早かった。外見はダブルオーに出てくるヴァーチェのように、両肩にせり出してくるのは基本装備のツインキャノン。バイザーが目を覆い、機体の詳細を教えてくれる。

そして眼下に迫ってきた島には生体反応が一つ、向こうにも気付かれたみたいだしこのまま行くか。ブーストを噴かせて着陸した。

「ウサミミ？」（あつ、しののたばね篠ノ之束だっけか）

凱サイド終

束サイド

逃走中の島に着いたのは完全装着して中が全く見えないロボットだった。バイザーからの視線は感じられるし敵対者かなっと思って

いると、光を放って人間が現れた。

「誰？」不快感露わにしたのが相手にも分かったのだろう、異世界人だなんて言い出した。私よりも頭が変なんじゃないかってそれが・・・設楽凱したらがいに対する第一印象だ。でも、意外と嫌いと感じなかった。変とは思ったケド。

束サイド終

凱サイド

「突拍子もないことだけど聞いてくれる？」相手が戸惑いそして軽く頷いてくれた。

「私は設楽凱。ここじゃない世界から来た異世界人だよ」

凱サイド終

「彼の登場はインフィニット・ストラトスの世界にどのように影響するのだろうか。それは遠くない将来に明らかになるだろう」

閑話〴〵もしもISで“天才”と“異世界人”が遭遇したら〴〵（後書き）

文才が欲しいデス。読者様はある程度の原作主人公たちの性格や行動は崩れるものと思って下さい。

“凱”のISが分からないという方はパテルⅡマテルでお調べ下さい。少しは分かるかと思います。

ゝ第二の世界はISゝ（前書き）

親友で読者でもある方から作者の好きなようにと言われましたので
こうしました。

↓第二の世界はIS↓

凱サイド

まあ普通は異世界人なんて言う頭ごなしに変わって言うのが多いけど、このウサミミはナノ単位までバラして良い？って物騒なこと聞いてくるんだもの。あゝあ、初対面は違う人がよかったなって内心想ったのは隠しておこう。

ISの生みの親ってのは変人なのかな？すぐに信じた。そのほうが楽だけど。今がどんな時期なのか聞いてみると織斑おりむらいちか一夏いちかっていう唯一ISに乗れる男性が現れたところみたいだ。

干渉する時期を探してみると一夏と鳳鈴音ファン・リンインが戦闘中に現れる無人機が二人だけでは勝てないと出た。

「さゝて、どうするかね？」と、干渉することに対して考えをまとめていると篠ノ之束が「だったら、その時にこっちからとっておきの援軍を送るよゝって言うのはどう？」って言いたい事を纏めてくれたから助かった。

凱サイド終

束サイド

バラしたかったけどパテルⅡマテルに搭載されているAIのレン？がヤダって言うから渋々止めたけど残念。友人いるのになってふと思った。だって異世界旅しているんでしょ、一瞬見える横顔がなんだか寂しそう。わたしには織斑千冬ちーちゃんがいるからいいけど……。

あつ、良いこと思いついちゃった。束姉さんが親友になってあげればいいんだ。気に入ったからどこまでも着いて行くんだから・・・。

束サイド終

く第二の世界はISく（後書き）

篠ノ之束さんが仲間になる？かもしれない。能力は一つ願っています。ませんのでどうなるかは未定です。

第10話〜束との日常〜（前書き）

束の性格をうまく書けるでしょうか。無理ですね。
束がオリ主に……。。

第10話 束との日常

凱サイド

さてと、無人機が乱入するまで少しの準備期間があったので、色々と備える時間があった。その中には自分のISがどんなスペックなのかを把握する必要があった。乱入を止めたはいいが、学園一つ消しました……。じゃ問題ありまくりだからだ。

主装武器：ツインバスターキャノン。肩からせり出す直径450mmのビームキャノンが2つ。

薙ぎ払い、一点突破、散弾を打ち出すことも可能。出力が50%以下なら一応ISの防御が働くまで手加減可能。70%以上で反動と殺傷能力が付く。

バイザーに直結させると超遠距離可能。

スナイパーモードでの距離は25km必中。40kmから70kmまではAIと連結して可能。

近接武器：大鎌。刃の部分はビームで出力を上げるとブーメランのように飛ばせる。通常背中に背負っている。両手首には接近された時の為にビームショットガンが一丁ずつ備わる。

防御：実弾をエネルギーを使わずに無効化可能。プロテクションを全方向に展開可能。スペック上では核ミサイルにも耐えられる。

「なにこれ？ 過激な武装のような気がする。まっ、この世界を滅ぼそうとか世界征服とかは考えていないしイレギュラーに対処するだけさ。終わったら帰るんだし……。」「篠ノ之とは別のラボを借りてスペック確認をしていたが寂しさは募る一方だった。

凱サイド終

東サイド

「ふんふん」逃亡続きで理解してくれる人もいないから寂しかったな。でもがーくん（凱のこと）が落ちてきて嬉しかった。やっぱり異分子を無くしたらいなくなっちゃうのかな」嬉しくて飛んだり跳ねたり繰り返したと思ったら壁に手を付いて突如としてやってきた新たな友人を心配して目に涙を浮かべる東だった。

「よしっ、落ち込んでいても仕方がないからがーくんエネルギー補充に行こうっと。」浮き沈みの激しいISの生みの親である。貸したラボが静かなのに気が付く。

「がーくん……？どしたの。おねーさんに言ってみなさい。ほれほれ」東が見たのはモニターに両手をつけて落ち込む凱の姿だった。

東サイド終

凱サイド

日常から非日常へと変化する切符を手に入れたは良いけどどこに行っても親友や恋人が出来ないことに気づいて作業の手を止めた凱だった。レンというデバイス兼ISがいるとは言っても生身でないことは最大の壁だった。両手をつき深いため息をこぼしているときにラボに入ってきたのは……。

「がーくん……？どしたの。おねーさんに言ってみなさい。ほれほれ」篠ノ之束だった。束も逃亡生活を一人でしている身、少しは通じるものがあつたのかもしれない。

気が付くと自分の心の中を吐きだしていた。寂しいこと、知り合いはできても親友や恋人が出来ないこと、恋人の時に強調したのは無理もないかもと自分で納得していたが。

うんうん、頷きながら何かを考え束が言つた言葉に啞然としながらもどこか嬉しかった。

「じゃあさ、束おねーさんが親友兼恋人になつてあげるよっ」束が握りこぶしを自分の胸で叩いてどうどうと言ひ張つた。

「はっ？い、いや。嬉しいけど俺は異世界を旅する身だから無理だよ」「5つ目の願いを叶ってないんじゃないの？異世界から別の世界へ誰かを連れて行けるようにするとか……。出来ないの？」

凄く凄く嬉しかった。その可能性も考えていないわけじゃない。だけど、誰かを連れてくるということはその相手はその元いた世界に戻ってこれない可能性だつてある訳だ。ぎゅっと両手を握りしめて出した答えは。

「もう一度深く考えよう。一時の気の迷いつてこともあるし。それからお互い確かめ合つても遅くはない」これ以上話す気はないと凱は束に背を向けて退室を促す。

「でもわたしはがーくんとどこまでも行きたい。それは変わらないよ」と後ろから聞こえてきて束は去り扉が閉まる。「俺だつてそれを選びたいよ」という声は束には聞こえなかったみたいだ。

凱
サ
イ
ド
終

第10話〜束との日常〜（後書き）

えつと流されるままに書いた結果がこれです！

もし解決した後に一人で別世界に行く場合物語は変わらず。

束が凱に着いて行く場合も支障がでないようにIS終わらせたいと思います。

皆さんはどちらがいいですか？一応期限は22日までです。

何もない場合は作者が選び後者を書きます

第11話〜オリ主のいない“なのは”の世界〜（前書き）

原作とおりです。

オリ主がいなければ普通のなのはの世界なので原作知っている方は読まなくても大丈夫です。

第11話「オリ主のいない“なのは”の世界」

なのはが魔法を習得した翌日、神社での戦闘しジュエルシード3個。

次の日、プールで封印完了ジュエルシード4個目。

土曜日頃夜の学校で封印5個目。

翌日サッカー終了後ジュエルシード発動により街に大きな被害。6個目。

次の週末。月村家訪問、フェイト登場、なのはと交戦。フェイトがジュエルシード1個目。

温泉で2泊。夜、フェイトと再戦。ユーノはアルフと交戦。フェイト3個目。

数日後、なのは、アリサと喧嘩。フェイトと街中（空中戦）で3戦目、RH&バルディッシュ破壊。フェイト4個目

戦艦アースラ登場。夕方、海辺の公園でフェイトとの4戦目。

ジュエルシードはクロノが回収。なのはアースラに搭乗。

海上の決戦 この間にアースラ搭乗から10日間経過。新たになのは3個（計9個）フェイト2個（計6個）回収。

なのは一時帰宅。アリサ、負傷したアルフを拾う。

なのは、バニングス家を訪問。アルフと再会。一時休戦し、協力的な体制へ

早朝、なのはとフェイト、臨海公園で決戦。同日時の庭園にて、プレシアとの決戦。

なのは、フェイト達との別れ。ユーノは残留。1期終了。

6月4日午前零時 はやて誕生日。自宅にて闇の書が覚醒。

10月27日 騎士達、はやての病因に気づき、闇の書のページ蒐集を開始。

12月1日 A、S本編開始。なのは、RH監修の元、魔法の練習。フェイトの裁判判決の前日。

12月2日早朝ヴィータによる蒐集。夕方、すずかとはやて出会う。夜ヴィータがなのはを襲撃。交戦後時空管理局に搬送される。

フェイト達（主にハラOWN家）が海鳴に引越し、闇の書340ページ。

12月5日？フェイト転入（週明けに転入と発言から推測）

数日後、なのは完治。フェイトとともに新デバイスで二度目の戦い。

12月11日？ 三度目の戦い、フェイト、魔力を蒐集され、戦

闘不能に。

12月12日？ フェイトがアースラで治療。はやて入院。

12月22日はやて入院中。シグナム蒐集中。闇の書606ページ。
ジ。

12月24日終業式。見舞いで互いの素性がバレる。夜、決戦。
アリサとすずか、巻き込まれる。

第11話　オリ主のいない“なのは”の世界（後書き）

IS編が一区切りしたらこの決戦からオリキャラ入れて書く予定です。

第12話 決意 (前書き)

束を連れて行きます

第12話 決意

凱サイド

「おはよう」次の日、なんて言っただけで会えばいいのか分からないまま朝の挨拶は普通にしようと思った。束も「おはよう、がーくん！」と普通に返事してくれたのには少し救われた。一晩考えたがかなり世界を変えなければならぬ決定をしなければならぬと思って、眠れなかったためだ。

この世界は大切、だから世界を元に戻した後、自分は消えなければならぬと思う一方、束が言ったように着いて行く宣言も嬉しかったりする。とうとう、自分の同行者が増えるわけだ。少しは期待もする・・・が、現世界の主要人物が消えた世界はどうなるのだろうかと思ってしまうと、独りで行動したほうが世界の為だ。と冷静でいたい自分がいたことに驚きを隠せなかった。

ふと、考えていると近くまで束が来ていた事に気付かなかったらしい。「ん？なに、束？」と少し頭を下げて気付かなかったことを謝っていると「私は本気よ。昨日言ったことに変わりはないよ。私は貴方に着いて行きたい」と真剣に目と目を合わせて言われた。

分かった。遊びじゃなくて真剣に考えているんだというのが伝わって来た時目からうるこが落ちたかのようにスッキリした。

凱サイド終

東サイド

ふう。眠れなかった……。がーくんのせいだ。私は本気。がーくんが何を考えているのか少しは分かるつもりだった。多分正常になった世界に篠ノ之束という存在がいなかったらどうなるのかと言う事を気にしているのだろう。でも私は神出鬼没！少しいなくなっただけで大丈夫だよ。

だからがーくん。私は貴方と着いて行きたい。いつまでも飽きるまでもいいから一緒に付き添いたいとまで思うようになったんだよ。こんな気持ちは初めて。千冬は分かってくれる親友だけどがーくんは違う……。よね。なんだろう関係は？って聞かれたらどう答えよう。

でもこの気持ちはどう考えても変わらない。がーくんに近づいて行ったのに気が付かなかったみたい。もう真剣に考えてくれるのはうれしいけど……。ごめんごめんって謝ってくれたからいいけどね。「どうしたの？」って聞いてくれるから深呼吸して。

「私は本気よ。昨日言ったことに変わりないよ。私は貴方に着いて行きたい」と、がーくんの大きく開かれた目を見て言った。

多分、数秒だったと思うけど目と目を合わせたあと今まで真剣さが目に見えていたのにそれが無くなったことに気が付いた。諦め？ううん、違う。真剣な表情が分かってくれたとはつきり分かった。

ここまで言わせておいてぐだぐだ優柔不断な事言ったら本気で怒っていたところだけがーくんも同行してくれることを願っていたみたい。本当に良かった。

束サイド終

凱サイド

本当についてくるんだ。これが、素で思ったこと。異世界旅人を普通に引き受けたけれど同行者の事を考えていなかったんだもの。時間が経つうちに寂しくなるのは普通の事。

純粹に願う。異世界からの同行者が欲しいです、と。これが5つ目の願いです。同行者の数は一人か二人。そう心から願った時意識が真っ白な空間に飛ぶのではなく頭の中に何かが入ってきたような感覚に襲われる。意識を失い気が付くと束が膝枕をしてくれた。

大丈夫。束と俺の願いは叶ったよ。と笑顔で言っていると心配そうに顔を覗き込んでいた束の表情が一変、満面の笑顔に変わった。

凱サイド終

束サイド

がーくんが私じゃない何かに意識を集中させたのがなんとなくわかった。むうー違う女性の事？って思ってたけどと妬いたけど違うみたい。次の瞬間ふらふらと体が揺れて床に向かって倒れたからだ。

「危ないっ」タッチの差でがーくんの体を支えることに成功した。心配させて、頭打ったりしたらどうしようって起きるまで心配だった。でも、目を覚まして「大丈夫、束と俺の願いは叶ったよ」って言ってくれた瞬間に今まで心配だったのに嬉しさが込み上げてきた。

あーこれで、一緒にいられるんだ。とね。

東
サ
イ
ド
終

第12話 決意 (後書き)

感想を下さった方ありがとうございました。

しののたば

篠ノ之束は同行者となって違う世界に行くときに着いて行く協力者となります

第13話　暇はよくない

凱サイド

結ばれた？のは嬉しかったけど暇になっちゃった。束と一緒にいるのは好きだよ。だけど、それとは別に暇って言言葉が繰り返して思考を埋めるようになってきた。

「束。何か良いアイディアない？」と膝枕してもらっている状態で上を見上げ顔と顔を向き合わせて聞いてみる。「ん」。私はがーくんと一緒に入れればそれで満足なんだけどね。一緒に嫌？」って可愛い事言ってくれるじゃない。デコピンを額に打ち「楽しいよ、だけど干渉するまで時間があるしIS学園も見えてみたいっしょ！」ってちょっと力説してみた。鈍感な一夏を見てみたいって言うのもあったしね。「じゃあさ、生徒として行ってみる？」と言う返事にはあんぐりと開けた口が塞がらなかった。

凱サイド終

束サイド

今まで灰色だった世界が色つきになって薔薇色へと転じたのはやつぱりがーくんのおかげだ。いつものように食事を取った後がーくんの頭を膝に上げて他愛もない会話をしている時だった。難しそうな表情を浮かべているのに気が付いた。

「暇」って言うんだもの。私といるのに飽きちゃったの？って何だか悲しくなってきた。「私はがーくんと一緒に入れればそれで

いいんだよ。一緒に嫌？」って多分涙が浮かんでいたのかもしれない。

ペシつと言う音とともにデコピンされたって気が付いた。軽くだから意識を向かせるためにやったんだと思う。「楽しいよ。だけど学園見てみたい」と力説されちゃった。ふふっ、良いこと思いついちやった。がーくんはどんな反応を見せてくれるんだろう。

「じゃあさ、生徒として行ってみる？」と言ったらどうなったと思う？「ヘッ・・・」って固まってた。そりゃあそうかもしれないけどちーちゃんたちに関わりを積極的に取らなかつたらいいんじゃないのかなって軽く思っていた。

がーくんを放っておいてもう一人の親友に電話する。どんな反応が返ってくるかな。楽しみ楽しみ。

束サイド終

織斑千冬サイド

突飛もない電話が鳴り響いたのは、ちょうど授業が終わって教室から出ようと思った時だった。電話のディスプレイを見て出たくなかったのは当然のことだろう。数回コールのち出た。

「もしもし？束か。どうした・・・はっ？いきなり言われてもはあ分かった、こちらで何とかしよう」電話の内容は思っていたこととの斜め上を行っていた。束が今一緒にいる子、がーくんと言ったがその子が学園に行きたいから転入させてくれって事だった。

数分後、履歴書が届く。見た瞬間背筋が凍った。束と同性能のISを製造し適正値はS。そして織斑一夏に続く男性だった。だが気を引き締めておかないと。弟に仇名すものだったら容赦はしない。

千冬サイド終

???サイド

「お嬢様、新たに学園に来る者の詳細データを手に入れました。ある意味規格外です」のほとけつつほ布仏虚がIS学園の生徒会長に告げた。

「いつもありがとう。へえ、これが新しく転入する生徒ね。あの天才と呼ばれた篠ノ之束と一緒に暮らしていたという時点で各国が飛びつきそうな情報よね。それに専用機も規格外。楽しくなりそうね」と扇子を扇ぎながら呟く。「あとこれは全世界に送られた警告文なのですが“がーくんに手を出したらどうなるかわからないよ”との事でした」

「それはそれで面白くなってきたわ」現生徒会長あらしきたてなし更識楯無が室内から青く澄み切った空を眺める。

更識サイド終

ここに干涉前に原作に携わろうとする本当はいない存在が、現れた。さてどうなるのかは今のところ分らない。

第13話 暇はよくない (後書き)

これ限界・・・

ISでの主人公設定

名前

設楽凱したらがい

年齢

17歳男性

性格

楽観的に見える飄々とした様子は表の面。裏では問題が生じたらすぐに行動して解決しようと奔走する熱血までは行かなくても熱い心を持つ。

容姿とスペック。

ヒロイロのような精悍な顔。鍛え上げられたその体のスペックは不明。願った力の中に最強の二倍の力を要求したため織斑千冬や更識楯無を圧倒するのはもはや当然。

IS適性

S+

その他

異世界を旅する者として最初は楽しみを持って行動していたが、段々と悲しみを増して行った。その時二度目の世界で出会った、篠ノ之束からの猛アタックを受けて同行者を増やし嬉しさ倍増。

イレギュラーを無くすとその世界から旅立つ。が、異世界に対して一度限りというわけではなく転々と移動を繰り返す。

専用機

名前

パテルⅡマテル

スペックは変わらず。

待機状態

右手にはめている腕輪。

その他

AIと言う名目で話しかけることが出来る。名前は「レン」。“
なのは”の世界の名残で念話も可能になっている。ISの補助担当。

第14話 同室の子は?? (前書き)

時間軸としては一夏が入学したてぐらいと考えてください。
時間軸ずれているのはどうしようもありません。
転生ものではありませんが原作知識は持っています。

第14話 同室の子は??

凱サイド

今日からIS学園に行く事となった。少し離れるわけだからたくさん束養分を補充しているところだ。抱き合い離れて、見つめ合いそして抱き合うを繰り返していた。

「そろそろ、行くよ。暇って言ってた俺の願いを聞いてくれてありがとう。あまり関わらないで傍観しているよ。でも束が行ってくれたように楽しむことは忘れないし！」グッと握りこぶしをつくつて東に見せ笑顔でラボの外に出た。

パテル「マテルを纏って行くのは学園へ。言う言葉は決まってる。「楽しんでくるよ」急加速し雲の上へと出てバイザーを通してラボを見降ろすとまだ手を振っている束が見えた。手を振り返して学園へと急いだ。

凱サイド終

束サイド

今日はがーくんが学園へと行く日だ。寂しくはなるけれど一緒にいてくれると言ってくれたし嘘偽りはないと思っているから大丈夫。こちらもがーくん栄養を吸収している。行く時間となった。がーくんは「楽しんでくるよ」と笑顔で言ってくれたから色々と準備したことは無駄にはならなかったと思って嬉しかった。

一瞬でパテルⅡマテルを身に纏って上空まで飛躍した。そしてこっちを見ている。手をブンブンと大きく振っていたのが分かったのか振り返してくれた。そして見えなくなった。

行ってから気づいた。学園の女子と男子の割合に……。だ、大丈夫よね。私のこと恋人って言ってくれるかな。また逃亡生活の始まりかな。でもすぐ帰って来てくれる。

東サイド終

凱サイド

数十分ほど飛行していると連絡が入った。封鎖したアリーナに降りるようにと。きびきびとした口調からこれがち……。いや織斑千冬さんになるのか、と。主要人物と出会う事でどんな事が起きるのか楽しみだ。

数人の大人が見える。教職員の方々だろう。少し離れた所には扇子をもった女性も見えた。あとで調べておこう。アリーナの地面数ミリで止まって降り立つ。パテルⅡマテルの装着を外してアリーナに立った。

「どもっ、ウサミミに学園行ったら？って言われてきた凱です。ちーちゃん！」言うか言わないかでガツツと殴られた。「ここでは織斑先生と呼べ」「……はい、了解です」

千冬「お前が設楽凱で間違いないな？」凱「そうです」そこにはスーツに身を固めた織斑千冬が仁王立ちし質問して来た。さあこれからどうなることやら。

凱サイド終

千冬サイド

篠ノ之束から連絡があつて間もなく上空から重量級のISに身を固めた青年が降りてきた。第一声が「ちーちゃん」とかいだしたから殴つたのは悪く・・・ない。ちゃらんぽらんに見えるけど本心はどうだろうか。まあ弟^{いちか}にとって悪影響なら容赦しない。一応クラスは一夏と同じにすると会議で決まつた。あとは部屋だが生徒会長が自分の妹と同じ部屋にしたらどうかと、監視の意味も含めてと相談して来たので了承した。

「設楽。お前の部屋が決まつた。更識^{かんし}簪^{かんざし}と言う子と同じ部屋だ」「はい？女子と同じ？あー了解です」一瞬怪訝な顔をしたが自分がどういう立場なのかを悟つたらしく同意した。明日から楽しみだ。

千冬サイド終

凱サイド

まあ、イレギュラー前に介入したのはいいけどどうなるんだろう。無人機戦は覚えているんだけど生徒会長の妹ってあまり記憶にないな。確か姉の生徒会長にコンプレックスを持つてる内気な子っていうイメージがあるんだけど。おっ、ここだ。どこかの朴念仁みたいなことにはならないぞっと。

凱サイド終

更識簪サイド

今日いきなり男子が増えたとお姉ちゃんから聞いた。それも同室になるって。監視までは行かないけど見ててとまで言われた。だったらお姉ちゃんが見ればいいのに。あっそっか。織斑一夏のほうが大事なのかな。私の事なんてどうにも思っていないだろうし。ん？来た、のかな。嫌だけどあまり関わらなくてもいいよね。

「どうぞ・・・」と返事をするうちとくだけた表情で入ってくる見たこともない男性が入ってきた。少し怖いかな。「えー設楽凱っていいいます。どぞよろしく」挨拶して来たから返さないといけないよね、「更識簪・・・です。よろしく」

小声で言ったのに聞いていたらしく名字か名前どっちで呼べば良い？って聞いてきたから名前ですって答えた。あとはベッドの位置とシャワーの時間などを聞いて決まったら疲れたらしくベッドに横になった。あまり緊張しない人だなとは思ったけどやっぱり男性は怖い。

私にはIS造らなきゃならないのに監視してって言われてお姉ちゃんみたいに何でもできるわけじゃないのに嫌・・・だ。

簪サイド終

凱サイド

原作に関わりたくないのに、何かの意図を感じるのは気のせいだろうか。あとひしひしと視線を感じるしこの部屋にも監視カメラが設置されてるみたいだ。この簪って言う子に監視とかを頼んでないだろうか、ここの生徒会長さんは？

束が手を出したら・・・、って交渉していたみたいだから大丈夫

夫としたいよ。

遠くから何かを突き破る音と男子の声が響いてきた。あつ、これ
って織斑一夏の声だろうか？って事は入学式終わった初日って事。
あー干涉するまで時間が沢山あるのか。でも楽しまなきゃ束に悪い
しガンバロー。

凱サイド終

第15話「朝の出来事」(前書き)

オリジナル要素です。

第15話　朝の出来事

凱サイド

朝、目が覚めると同室の子は起きて机に向かって何やら熱心に作業をしていた。控えめに朝の挨拶をしたが聞こえていないくらい熱中していて気付かない様子。

「おはよう、簪は早いんだね？」

横に行って部屋の扉をコンコンと叩きながら声をかけるとやっと気が付いてくれた。

簪「お、おはよう・・・気が付かなくてごめんね」

俯きながら返事を返してくれたから。

「気にしないでいいよ。熱心に作業していたみたいだし男性に慣れていないんじゃないかな」

気付かなかった事について気にしていないことを伝えるとようやく顔を向けてくれた。

何かを探るような眼は好きになれなかったから率直に言った。

「誰かから俺の事探るように言われた？」

そうしたら俯き頷いたので

「誰？」

問い詰めるんじゃないやなくて出せるだけ優しく聞いてみた。やはり生徒会長が根源だった。ため息とともにベッドに腰を下ろすと。

簪「怒らない、の？」

多分黙っていたことに対してだと思いが怯えながら言う簪は小動物を彷彿とさせていた。

「ん？どうして簪に対して怒るの？君の姉に対しては怒っているが。簪には怒ってない。正直に話してくれたから嬉しいだけだよ」

優しく頭を撫でながら言葉と行動にあらわした。

ポロポロと涙を流した時には驚いた。内気で男性にあまり懐かないイメージがあったからだ。

凱サイド終

簪サイド

早朝に起きて作業をしていると自室の扉を叩きながら挨拶してくる男子がいた。昨日から同室になった凱っていう男子だ。あまり知らされてはいないけどE.S学園に入ってきたから少しでも探って生徒会に伝えるように言われていたので知らず知らずのうちに監視するような眼になっていたのかもしれない。

凱「誰かから探るように言われた？」

って聞かれた時には怒られるって思ってた身を竦ませ頷いた。姉からと聞くと疲れたようにベッドに腰を下ろして怒る表情を見せなかったから聞いた。

「怒らないの？」

そうしたら、正直に話してくれたことに感謝してくれたのには驚いた。気が付くと頭を撫でられていた。いつも出来の良い姉と比べられていたから自分の感情を表に出せずにたまっていたものが流れてきたみたい。涙が止まらなかった。オロオロする目の前の凱君が同室で本当に良かった。

簪サイド終

凱サイド

涙が止まった後二人で笑った。意味はないけれど笑った。そして、扉を叩く音が聞こえたので簪が応対した。そこにいたのは女子だった。当たり前だけれど。一緒に食事をしないかというのでついて行った。道中自己紹介するとそれは布仏本音のほとけほんねと言うこれまた生徒会のメンバーだった。一応警戒はさせてもらうよ。初対面の妹を使って監視しようとしたから何かあれば報復するぞ的な考えを持っていた。

凱サイド終

簪サイド

朝食と一緒にどう？って誘ってくれたのは本音ちゃん、だけど挨拶を聞いたとたん凱君の雰囲気は鋭いものとなった。多分私を使っ

て監視していたことに腹を立てたんだと思う。嬉しいな。……
ん？今の気持ちは一体……。？本音ちゃんが横で含み笑いを
していたのにも気が付かなかった。凱君もいつの間にか校内放送で職員
室に行ったことにも気付いていないから。

簪サイド終

ところ変わって職員室。

凱「はあ、1年1組ですか。一夏と同じにしたのには何か意図的
な魂胆を感じざるを得ませんね」

大体予想はしていたがこの学園は隙がありそうでなさそうなのが
不気味だった。

織斑先生「私の後に着いてきて教室の前では呼んだら入ってきな
さい」

凱「了解です」

いよいよはじまる原作＋傍観者はどのような物語を織り成すのだ
ろうか？

第15話『朝の出来事』（後書き）

ハーレムにはしません。好意を持っても友情で終わるようにします。

第16話　針のムシロってこの事かっ（前書き）

更新できなくて申し訳ないです。一ヶ月に一度は少なくとも投稿したいです。

第16話　針のムシロってこの事かっ

千冬サイド

全くアイツときたら、大きな問題ばかりを起こしておって……。一夏が世界初のES搭乗者になったばかりだというのにイレギュラーな存在も来るなんて。まあいいさ。一夏に仇名す者であれば容赦しないからな！

「おい、お前ら早く席に着けー！今日から転校生が新たに来ることになった。紹介しよう、入ってこい……」

凱「失礼します……」

クラスメイト「だ、男性……？」

「ああ、そうだ。凱！自己紹介をしろ」

凱「はい……。設楽凱といいます。ここには特例で入ることができました。よろしく、あと織斑先生？ちよつと皆に見てもらいたいものがあるのですがよろしいですか……？」

「ああ、長くならなければ許可しよう」

凱「大丈夫です。一応、心の準備だけはしておいたほうが良いかもしれません……」

「えっ、それはどういうことだ？」

目の前にいる二人目の男子は私の言葉を遮ると、ディスプレイを起動させてクラスのみんなに見えるように映像を見せた。……見なきゃよかったと後悔したのは言うまでもない。

千冬サイド終

凱サイド

ここに来る前に面倒くさい事柄に巻き込まれないようにと、束が渡してくれた注意事項を映像化したものを持たせてくれた。何やら嫌な予感がしたが束が俺のためにやってくれたことだし、とあまり深刻なことを考えていなかったがその思考は覆されることになるとは思ってもよらなかった。

自己紹介ののち、クラスを眺めるとやはり男子は珍しいのか動物園の珍獣のように見られていた。それに女尊男卑という風潮の中、女子が偉いとトチ狂っている連中もいることだろうし気は抜けなかった。

「織斑先生。皆に見てもらいたいものがあるのですが……」

一応の許可を貰うと警戒される前にこれを見せなきゃと思った。多分、束が何かをやった感は拭えなかったが……

凱サイド終

砂嵐の後、ウサミミだけが映像に映った。その瞬間、ガンツと机に頭をぶつけた女子もいたがそのまま映像は移り変わる。

東「ハローハロー。ISの生みの親、東ですよ。聞いたとおり今日から新しく入った男子の設楽凱は私の恋人だあ！ってことで要らぬ偏見や、女尊男卑を示した女には厳しい処罰が望むんで覚悟しておくよ」に。じゃあ・・・がーくん何かあったらラボに連絡してね？」

ブツツと言う音がして映像が終了した。後に残ったのは呆然とする女教師二人と、机にぶつけたままの女生徒が一人。そして訳が分からないほか多数のクラスメイトだった。

凱サイド

これはありがたいけど、織斑先生の視線が痛いんだがな・・・。
東あ、恨むよ？

千冬「一体これはどういうことかな？説明してもらえるとありがたいんだが・・・。」

ちよつとどころじゃない、氷点下まで下がったかのような教室の雰囲気の下、織斑先生の声だけが響く。

「ああ。そのままの意味ですよ。私は篠ノ之束に保護されたということですよ。そして一緒になった・・・。この社会は望んでも望まなくても女性が優位に立つことが多いが、俺に対してそういうことを行うヤツは容赦しないと、そういうことです」

IS学園に来る前に世界を一通り見てみた。するとどうでもいいような女性が醜くも男性をコキ使う風景を何度も見てきた・・・。それを束に言うところなつもりじゃなかった・・・と涙ながらに言うのでそれを変えようとする努力を惜しまないことを伝えてきた。

すると、学園にくるときに映像を渡されたわけだ。クラスを見ても動揺が広がっていくのが目に見える。織斑先生に行っておかきやならないことが一つだけあった。

「先生？一つだけ忠告……。罪のない生徒を使って監視するのをヤメロ！ISの機能を停止させようか？」

凱サイド終

千冬サイド

束からもたらされたものは、想像以上だった……。予想もしていないことだったからだ。設楽って生徒は何をこの学園に持ち込もうと言うのだ？さっぱり分からなかった。

「どういうことが説明してもらえるかな……。？」

自分でも声が冷酷になるのを抑えきれない。クラスメイトの数人がヒツ、と悲鳴を上げたのを視界にいれながら正面に立つ設楽に声をかけた。だけど、返ってきた返事は意外なものだった。

設楽が束に保護されたこと。女尊男卑な社会を望まないこと。その社会を望まないことなどをあげたのだ。そして気づかれていたのか、生徒を使つての監視を辞めるように言ってきた。

だが、私はやめるわけにはいかない。こいつは危ない！何をやるかわからないからだ。絶対にその本性を暴いてやる……。

千冬サイド終

このあとの話を続けよう。教室でのいざこざはそれで終了した。織斑先生の顔は強ばったままだったが、設楽も布仏本音の横に座り授業も何の師匠もなく終わった。少し設楽に対する生徒の様子が警戒心をもった状態のままだったが……。

傍観者のままでいたのに、そうならないのがイレギュラーというものだ。何が起こるかは誰にもわからない。

続く……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6285w/>

非日常の旅人

2011年11月4日02時00分発行